

## 【第1部 基調講演】

## アメリカの少年非行対策プログラム

メーガン・カーリーチェク

ニューヨーク州立大学オールバニー校

社会安全学部 准教授

皆さん、こんにちは。今日は、お招きいただきましてありがとうございます。まず、ここ京都産業大学にお招きいただいたことを心より御礼申し上げたいと思います。

今日は、少年司法制度について、今後どのようにしていけばいいのかということについて、皆さんにお話しできることを大変うれしく思っております。

最初に、私が深く信じている幾つかのことについて申し上げたいと思います。私は社会学者でありますが、社会学者として次のように思っております。どのような子どもであっても、決して初めから罪を犯すような悪魔として生まれてくるわけではない。さまざまな個人的な性格と社会的な環境との相互作用によって、そういった状況になってしまうのだと私は考えています。どんな子どもたちであっても、あるよい機会を与えられたのであれば、必ずや更生することができるかと私は考えています。

二つ目に、決して少年司法制度によって非行が起こってしまうわけではないと私は思っています。少年の非行というのは、司法制度によるものではなくて、社会の闇や病気を反映しているものだと思います。社会の問題が反映されているのが少年非行であるということです。

ですので、少年司法制度を変えることによって、この問題を消し去ることは決してできないと私は思っています。少年司法制度にできることは問題を緩和すること、あるいは、これをさらに悪化させないということであって、決してそれを全て解決できるとは考えてはいません。

次に、今日は司法システムについて、どのように改善をしていけばいいのかということについてお話をするわけですが、その前に、日本では素晴らしい少年司法制度があるということを申し上げておきたいと思います。

世界各国を見渡してみますと、多くの国々では、より罰則を強化すること、あるいは、より若年者においても罰則を強化することがなされており、そういう潮流にあります。

しかし、ここ日本では、やはり二十歳というところで、しっかりと区切られているということが一つ素晴らしいことだと思います。また、保護観察についても、日本の制度は素晴らしいと思います。

世界各国を見渡してみますと、こういった保護観察制度というのは、より公式なものになってきています。そうすることによって、個人的な少年犯罪者と保護観察官とのつながりに、あまり目が向けられないようになってきています。また、家族とのつながりといったところにも、あまり焦点が向けられないようになってきています。

日本においては、保護観察官と子どもたちの関係の強化に非常に目が向けられています。例えば、家庭で保護観察官と少年が食事を共にすることも決してまれではないと聞いています。

また日本におきましては、施設に収容するということよりも、できる限りは家族と共に少年を過ごさせていると聞いています。施設に入れるというのは、ほかの手立てが全てなくなった場合のみだと聞いております。その点も、やはり素晴らしいと思います。

そういった対策もありまして、施設に収容される少年の率も、非常に日本では低いと伺っております。また、収容され

た場合には、例えば教育的な内容、職業訓練などが行われているということで、立派な大人になるための更生施設という役割が強いのだと理解しております。

従って、今日は、ここにいらっしゃる保護観察官の皆さま、警察官の皆さま、現場でご活躍の皆さまに、日本のシステムは素晴らしいのだということも、ぜひ認識いただきたいと思います。

幾つかの事実について確認をしておきたいと思います。これは、どこの国においてもそうなのですが、まず、犯罪を犯すというのは若い男性が多いということ。それはいろいろな犯罪がありますし、犯罪の重篤度にもよりますが、基本的には男性が多いということ。

二つ目の点は、ほとんどの少年犯罪というのは、年齢が上がるにつれて徐々になくなることです。犯罪のカーブを見てみますと、だいたい窃盗においては17歳がピーク、暴力犯罪においては18歳から19歳ぐらいがピークとなります。その後、年齢が進むにつれて、こういった犯罪も犯さなくなってきます。そして成熟して、大人になって落ち着いてくるというのが、一般的に言われているところです。

こういった事実について確認をしましたけれども、これは歴史を振り返ってみても、すでに確認されていることでしたし、統計的に見ても、すでに確認されているところです。

では、ここで少し社会学の観点から離れて、医学の観点から少年犯罪を見てみたいと思います。アメリカで研究があるのですが、これはガイド博士という先生が、アメリカ国立衛生研究所からの資金を得て行った研究です。

この先生は、11歳から20歳までの子どもたちの脳をイメージングの研究を行いました。その結果、人間の脳は20歳半ばまでは成長が続くということが分かったのです。特に合理的な判断をする前頭皮質の部分については、女性は21歳まで、男性は24歳までは成熟しないということが、この研究の結果、分かりました。

意思決定を行う際に、若者は扁桃で意思決定をしてしまう。扁桃というのは人間の感情をつかさどっている部分なのですが、この扁桃の部分で意思決定をする結果、より感情的な意思決定をしてしまう。あまり合理的ではない意思決定をしてしまう。そして、自分たちの衝動を抑えることができない。それが若者の脳であるということが分かりました。

意思決定については、さらに他の研究もなされています。青少年と大人が意思決定をする際に、脳がどう違うのか、何が違うのかということです。まず一つ目に違うこととして挙げられることは、決定をする際の観点が違う。それから、どのくらい自制心があるかというところが違う。これが二つの大きな違いです。

まず、意思決定について何が違うかといいますと、青少年の子どもたち場合には、より自分が属しているグループの影響が多い。友達にどう思われるか、友達に認められるかということが非常に大きい。

そして、自制心についても、将来的なことよりも、いますぐそこにあることだけに目が行ってしまうというのが、子どもたちの意思決定に関する特徴です。例えば万引きについて見てみますと、万引きをすればどうなるのか分かってはいませんが、つい忘れてしまって、目の前にあるものがすぐに手に入る、あるいは、ほかの子どもたちに認められるといったことばかりに気を取られて、意思決定をしてしまう。その結果、万引きをしてしまう。それが若者の特徴です。

こういった医学的なさまざまな研究から、私は三つの答えを導き出しました。まず第一は、子どもたちの非行は一時的なものであって、そのときは短期間は逸脱した行動をしてしまうかもしれないけれども、それが決してどういう大人になるかを規定するものではないということ。従って、少年司法制度においても、子どもたちをより社会的に復帰できるような方向に持っていかなければならないということです。

第二は、ほとんどの少年非行においては、それは一時的なものではあるのですが、子どもによっては慢性的な再犯者になってしまう。そういう大人になってしまうという場合もあります。ですので、そういった子どもたちを早期に特定することが重要です。そういった子どもたちについては、より積極的な介入が必要になることもあるかもしれません。

第三は、こういった少年たちを決して大人のミニチュアとして扱ってはならないということ。先ほども申し上げました

ように、生物学的にも子どもと大人には大きな違いがありますし、それによって感情が違ったり、意思決定の方法が違ったりするわけです。ですので、外見は大人に見えるかもしれない。しかし、大人とは違うものとして扱っていくことが非常に重要です。

これらに鑑みて、どのような政策を持てれば、彼らに、よりよい大人になってもらうことができるのか。また、どのような政策、サービス、いまはないサービスであっても、将来的には、どんなものを導入していけばいいのかが、今日の一番大きな問題となってくるわけです。

アメリカでも、過去にさまざまな方策、政策を試してきました。どのようなプログラムがうまくいくのか、どのようなプログラムがうまくいかないのかについて、知見も積み上がってまいりました。今日は特に、うまくいかなかった事例を紹介したいと思います。というのは、やはり間違いから学ぶというのが一番効果的ではないかと思うからです。

さまざまな政策がありますが、それを一つ一つタイプ分けして見ていきたいと思います。まず一つ目のタイプですけれども、脅しを用いるというもの。脅しを用いても、うまくいきません。子どもたちは脅しを言っても真に受けませんし、逆に面白がったりしてしまうこともあります。

アメリカで一度試された例で、スケアードスト레이트というプログラムがありました。これは子どもたちを実際に刑務所に連れて行って、そこに服役している人たちが刑務所での生活がどんなにひどいものかと言って脅かすというものです。

子どもたちに、実際に大きな声を出したりして怖がらせようという戦略ですけれども、子どもたちはこういったことは決して真に受けません。面白がってしまうことさえあります。冗談だと思ってしまう。そして、刑務所は結構格好いいんじゃないかと思ったりもする。なので逆に、これは犯罪を減らすというよりは増やすという結果となりました。

次に二つ目のタイプで、ショック療法が試されたこともありました。これはアメリカの軍隊の訓練を取り入れたものですが、非常に厳しい身体訓練を行うことによって、子どもたちをたたき直そうとするものです。ただ、これもうまくいきませんでした。

軍隊の場合には非常に厳しい訓練をしてたたき直そうということで、それから軍事的な訓練を徐々にやっていくのですが、身体的な訓練だけを取り出して子どもたちにやってみても、うまくはいきませんでした。

次に少年院のようなもの。これもうまくはいきませんでした。アメリカでも少年院のような施設で、教育的なプログラムをグループで行うということもやりました。これは二つの理由がありまして、うまくはいきませんでした。

まず一つ目の理由として挙げられるのが、こういったプログラムでは子どもたちを家庭から引き離してしまう。そうすることによって家庭との分断、あるいは学校との分断が生じてしまうということ。

二つ目に、こういったプログラムでは非行少年がグループで活動を行います。先ほども申し上げましたように、子どもたちは意思決定をする際にも、ほかの子どもたちの目を非常に気にするということもあって、こういったプログラムを行っても、更生をするというよりは、犯罪の学校に子どもたちを入れてしまうという状況になってしまいました。

それから、公式なシステムを用いて子どもたちを家庭から離すことも、十分に注意をしてやらなければなりません。まず施設に子どもたちを移す場合には、やはり家庭から引き離すことになってしまいます。

しかし一方で、こういった非行というのは、先ほども申し上げましたように、ごく一時的なことであり、時間がたつて大人になれば、そういったことはしなくなることもあるわけです。ですので、逆に施設に子どもたちを収容することによって生じる負の側面に目を向けなければなりません。

例えば、レッテルを貼られてしまうとか、レッテルを貼られてしまうことによって、その子ども自身も社会から疎外感を感じてしまう。そういった負の側面がやはりありますから、施設に収容するというのであれば、十分に注意してやっていかなければなりません。

これまで、いろいろとうまくいかなかった事例について話をしてきました。これをお聞きになって、いったい何をすれ

ばいいのかと思われるかもしれません。アメリカでも、うまくいかなかったことだけではなくて、うまくいっているプログラムも多々あります。

いまから、うまくいっているプログラムの名前のリストを読み上げていきますので、その中でどんな言葉が出てくるかに注意を向けていただきたいと思います。そのことによって、何ができるのか、ヒントを導き出すことができると思います。

まず、家族が一緒にいること。成長中の大人であるのだということ。多面的な家族セラピー。地域社会における関係の強化。Big Brothers, and Big Sisters、これはお兄さん、お姉さんという意味です。家庭と学校が一緒になること。家族が重要だということ。機能的家族療法。家庭を再構築するプログラム。それから、家族と教師との関係のプログラム。看護師と家族のパートナーシッププログラム。親と子どもの関係構築プログラム。これらがプログラムの名前です。

これらを見ていただきますと、やはり親、子ども、家族、姉、兄、教師、地域社会と言った言葉がキーワードになってくるかと思います。

幾つか、成功しているプログラムに共通している点があります。その共通点について、次に見ていきたいと思います。

まず一つ目の共通点ですが、成功している更生プログラムにおいては、できる限り子どもたちを家庭環境に置いていく。そして、学校、親、教師といった人々が、できる限り更生プロセスに関わる。これが成功の鍵です。

先ほども申し上げましたように、何も子どもたちは司法制度によって犯罪を犯しているわけではありません。社会に問題があり、その社会の問題が子どもたちの犯罪に反映されているわけです。

学校に問題がある子ども、家庭に問題がある子ども。その全てに問題がある子ども。こういった子どもたちには特別なサポートが必要になるわけです。そのサポートを提供することによって、負の環境に生まれた子どもたちも、うまく青年期を乗り切っていくことができるようにしていかなければならないということ。

二つ目に、子どもたちそれぞれの持っているリスクの評価（assessment）をしっかりと行うということ。また、そのリスクの評価の結果に基づいてカスタムメイドの、その子どもたち個々人に合ったサービスを提供するということ。

それから、評価ですけれども、何も子どものリスクのみを評価することだけではなくて、その子どもの強み、よいところを評価してあげるということも非常に重要だと思います。

どんないいことがあるのかを評価して、それを伸ばしてあげる。それから、子どもたち自身にも、その強みに気付かせてあげる。それが非常に重要だと思います。こういった包括的なプログラムが非常に大きな成功を収めています。

家庭の中で、できるだけ自然な環境で行動療法を行っていくことが非常に重要です。例えば施設に収容して子どもたちは更生したとしても、そこで正しい行動をするようになったからといって、決して家に帰ったときにも、その正しい行動が続くとは限りません。

どうということかといいますと、そもそもその子どもが問題行動を起こした理由、原因というのは、家庭とか地域社会にあるので、戻ったら、やはり元の状態に戻ってしまうこともあり得るわけです。ですので、やはり初めから家庭において、できるだけ自然な環境で更生プログラムを進めていくことが重要だと思います。

三つ目に重要なことは資金の問題です。やはり、しっかりと資金がなければ、こういったプログラムは実行できないということ。例えば10時間のカウンセリングが必要だというプログラムであれば、必ずしっかりと10時間のプログラムができるように資金を確保していくことが重要です。例えば、保護観察官が一人で、いっぺんに15人を担当するという決まりがあるのであれば、15人以上は見させないという、しっかりと資金源を持っていることが必要です。

時に資金が厳しいということになってくると、サービスの質が低下したり、あるいは一人の保護観察官の担当が増えたりということも起こりかねません。しかし、私が今まで会って話をしてきた警察官、保護観察官の方々は、本当に一生懸命に子どもたちのためにお仕事をなさっているのですけれども、やはり皆さん人間ですから、スーパーマンのような仕



事はできないわけです。しっかりとした資金を持って、リソースを確保しておくということが重要です。

プログラムといっても、さまざまなものがあって、子どもたちが小さい初期の段階から介入するものから、より積極的な、より大きな子どもたちに介入するものまで、いろいろあります。ここでご紹介したいのが、アメリカの10代の未婚の母親たちに向けてのプログラムです。

アメリカの10代の未婚の母というのは非常に大きな問題なのですが、彼女たちは非常にリスクが高いと言えます。社会的、生物学的に赤ちゃんがどういうふう to 成長していくかということに対する知識もあまりありませんし、生まれてくる子どもが、そういったリスクにさらされる可能性があります。

ということで、アメリカでは10代の未婚の母たちに対して看護師を派遣するプログラムを行っています。この看護師は、実際に赤ちゃんが生まれる前から、この10代の母親のところに行って、いろいろな教育を行います。出産後もサポートを続ける。何か子育てで質問があれば、それにも答えてあげる。また、おもちゃとか、教育的な資料を提供することもしています。

ここで私が強調したいのは、介入するのであれば早すぎることはないということです。やはり再犯を繰り返す子どもたちを見ていると、ごく小さなときに悪い環境にさらされたということが往々にしてありますので、例えば、あまりよくない環境に生まれてしまったとしても、そういった事実を克服できるようなサポートを提供することが重要です。そうすることによって、生まれてくる子どもたちも犯罪者にならない。そして、よりよい生活を得ることができるということを実現したいわけです。

保育園を提供するプログラムも、アメリカで実験的に行ったことがありました。これはペリー・プレスクールプログラムという、非常によく知られた実験です。123家族、アフリカ系アメリカ人の低所得の家族を選んで、それを2群に分けて、1962年から1967年まで保育園のフリースクールのサービスを提供する群と、しない群に分けて、その後、その子どもたちが40歳になるまで追跡調査を行いました。

その結果、この保育園のサービスを受けていた群の方が、生涯にわたっての逮捕回数が少ない、高校をちゃんと卒業した、高等教育を受けた、そして、自分たちで家族を持って子育てを行うという人も多かったという結果が得られました。

では、どういった子どもが慢性的な犯罪者になるのかということが疑問になります。これに対しても、テリー・モフィットという方が研究を行っています。彼女によりますと、犯罪には二つのタイプがあると。まず一つ目は、ほとんどがそうなのですが、青年期のみ非行犯罪を犯してしまう。そして、年齢が上がってくると、そういうことはしなくなる、成長するといった人々。

ただ、こういった人々だけではなくて、やはり慢性的な再犯者になってしまう人々もいるわけです。そういった人々は、ごく初期の段階から、その徴候が現れます。学校において、親に反抗的である、教師に対して反抗的であるとかがあります。

例えば、暴行、窃盗といったことにも関わってしまう。あるいは、アルコール、違法薬物といったものに関わってしまう。ただ、こういった人々でも、やはり早期に介入することによって、よい結果が得られるという研究結果となっていました。

次に、初期の介入が非常に有効であるということで、こういった介入の事例について、機能的家族セラピーというものを紹介したいと思います。これは一般的に、だいたい1時間のセッションを8回から12回ぐらい行うというものです。より深刻なケースについては、30時間ぐらい、こういったセッションを行います。

だいたい3カ月間ぐらいで、このセッションを終了します。これは家庭から外来のかたちで行うこともできますし、子どものニーズ、あるいは家族のニーズに合わせて、さまざまなかたちでセッションを行うことができます。

このセラピーは、基本的には、エンゲージメント（関与）、モチベーション、リレーショナル・アセスメント、行動療法、

一般化という五つのフェーズからなっています。

まず、関与のフェーズにおきましては、クライアントとセラピストの関係の構築を行います。

そして、モチベーションのフェーズにおきましては、家族と犯罪者自身との関係の構築を行います。この関係構築の間に、さまざまなリスクを取り除く。例えば、希望が持てないと思っている子どもであれば、そういったことに介入する。あるいは、自己肯定感を持てないという子どもは、こういったところも変えていくという介入を行います。

次に、関係評価のフェーズです。ここでは、少年と家族との関係の評価を行います。よく見られるパターンなのですが、少年がよくない行動を起こすと、それに対して家族がフラストレーションを募らせる。それによって非常に怒ってしまう。怒ってしまうことによって、子どもたちはより自信をなくしてしまったり、自分は愛されていないと感じてしまう。そのことによって、またこんな問題行動を起こしてしまうという負の連鎖があるわけです。その負の連鎖を立ち切ることが、ここでの目的となります。

次に、行動療法のフェーズです。ここでは、どういった問題行動があるのかを特定して、それに介入していく。例えば、スキルのトレーニング、あるいは対立に対して、どう対処すればいいのかを教えていく。

最後に、一般化のフェーズです。ここでは、プログラムが終わった後も、もし何か問題が生じたときには、どこに助けを求めればいいのかという情報を家族へ提供するということを行っています。

いま申し上げたことでお気づきになったと思うのですが、こういったプログラムは従来の保護観察のシステムと、子どもたちを施設に収容するという、その中間に来ていると思います。ただ単に保護観察として子どもたちを観察する、逸脱行為を行わないのかを見ておくということだけではなく、また収容することだけでもなくて、その真ん中にあるギャップの部分を埋めているわけです。

それによって子どもたちの発達に必要なサービスを提供しているというのが、こういったプログラムです。このギャップを埋める、間を埋めるということが、将来的な更生施設を考える上で非常に重要なのではないかと思います。

いま申し上げたプログラムは、非常に深刻な状況にある子どもたち向けのプログラムです。一方で、一時的に非行行為をしてしまうような子どもたちも多数います。こういった子どもたちに対しては、どういった介入方法があり得るのかということでご紹介したいのが、ビッグブラザーズ・アンド・ビッグシスターズ・プログラムというもので、ボランティアの若い人に少年等のお姉さん・お兄さんになってもらうというものです。

これはメンター・プログラムとも、アメリカでは呼ばれています。いわゆるお兄さんお姉さんたちにロールモデルになってもらうのです。まずは信頼関係を構築するということで、一緒にスポーツ、サッカー、野球などをしたり、お祭りに行ったり、子どもたちの卒業式、誕生日という重要なライフイベントに参加してもらったりということをしています。

先ほどのグループで更生を行うのと一つ大きく違うのは、あくまでも1対1のプログラムだということです。グループですと、ほかの子どもの影響を受けてしまう、ほかの子どもの目を気にしてしまうという、よくない側面があります。これは、それがないということが、まず一つ言えます。

これは例えば、離婚であるとか、死亡したとかで親がいない子どもたちにとっても非常に有効です。大人には聞けないような質問を、こういったお兄さん、お姉さんにできるということで、それほど深刻ではない子どもたちに対しては、こういったプログラムを単独で提供することもできますし、より深刻な状況にある子どもたちについては、ほかのプログラムと組み合わせて提供することも可能かと思います。

このプログラムは、従来の保護観察システムと施設収用の隙間を埋めるようなプログラムになっていると思います。やはり将来的には、この隙間を埋めるようなプログラムが、青少年の更生において重要になってくると思います。

アメリカの最近の傾向として一つ挙げられることですが、科学的根拠に基づくプログラム（Evidence-Based Program）というのが、より多く取り入れられるようになっていきます。うまくいくんだという、しっかりとした科学的根

拠のあるものだけを行っていいということなのです。

こういったアプローチに関しては、よい点と悪い点の両方があると思います。まず第一に、よい点としては、少なくとも悪い影響があるようなプログラムは、これに従っていれば導入することはないだろうということ。例えば、先ほどご紹介したような、子どもたちを脅かすようなプログラムは、科学的に子どもたちがうまく反応しないということは分かっていますので、そういったことはしない。第二に、よい点としては、科学的根拠に基づいてうまくいっているプログラムをよりたくさん、各地域社会において導入することができるということ。

ただ、注意をしなければならない面もあります。例えば、ある地域でうまくいったからといって、それが全ての地域でうまくいくとは限らないわけです。

そこで重要なことは、なぜそのプログラムがうまくいったのか、その「なぜ」といったところを理解するということです。「なぜ」ということをしっかり理解していれば、そのほかの違うニーズ、違う問題を抱えた地域社会においても、それに当てはめて、うまくカスタムメイドしながら適用していくことができるのではないかと思います。

もう一つ、私がこのエビデンスベースドのアプローチで心配していることは、少年司法当局の創造性を疎外してしまうのではないかとことです。例えば各地域において、こんなことをやってみたい、こんなことがうまくいくんじゃないかと思ったとしても、やはり以前のエビデンスがないからできないとか、そういう状況になってしまうことを懸念致します。

やはり、やってみよう。これがうまくいくのではないかとと思われることは、どんどん試してみればいいと思います。ただ、新しい試みを試される際に私が提案したいのは、研究者と協力をするということなのです。協力して、協働で新しい試みを導入していくということが、よいと思います。

研究者と現場の人々が一緒に協力し、その研究者からは、新しい試みする際には、どんなデータを集めれば、それがうまくいっているかどうかを評価できるのかを伝えていく。そうすることによって、その試みがうまくいっているかどうかを確実に、正確に評価することができると思います。

もう一つ重要なことは、ただ単に研究者側は、うまくいっているか、いかないのかという、白黒をはっきり付けるような「だめ」とか「いい」とか、それだけを言うのではなくて、フィードバックをすることだと思います。例えば、そのプログラムのどんなところがうまくいっているのか、どんなところがうまくいっていないのか、それはなぜなのかを伝えていくことが重要だと思います。

そういったフィードバックをすることによって、現場の人々は、そのプログラムが、うまくいっているところは、どんどん拡大していくことができるし、なぜうまくいっているのか、なぜうまくいかないかというところがはっきりと分かれば、どんどん子どもに合ったかたちでカスタムメイドで、その試みを変えていくことができると思いますので、フィードバックのループをしっかりとつくってやっていくことが重要かと思います。

もう一つ、アメリカの最近の動向としてご紹介したいのが、修復的司法（restorative justice）です。これはプログラムの名前ではなくて、考え方、哲学です。例えば、少年が何か問題を起こしてしまったら、それを元の状態に戻させるというものです。これには被害を受けた個人ですとか、地域社会も関わるかたちで行っていきます。

例えば、元に戻す一つの方法としては謝罪があります。冒頭で謝っても構いませんし、手紙を書くということも一つあるかと思います。あるいは、お金を取ったのであれば、お金を返す。ものを壊したのであれば、それを元に戻すということを行います。

これはどのように行われるかと言いますと、各地域社会において、修復的司法委員会というのをつくります。この委員会のメンバーは、各地域社会に実際に住んでいる人々です。その委員会のところで、少年、被害者も一緒になって、その被害者は自分がどんな被害を受けたかということを説明する。その少年も自分の状況を説明するというを行います。

そうすることによって、その委員会では、その状態を修復する、元に戻すためには、少年は何をすればいいのかということとを提案するのです。

私は非常に驚いたのですけれども、この手法というのは非常に軽微な犯罪から非常に重篤な犯罪まで、さまざまなタイプ、種類の犯罪に非常に有効だということです。

修復的司法プログラムについて、私が個人的に知っている事例をご紹介しますと思います。これはある教会に子どもたちが夜中に入って、ものを壊したり、壁に落書きをしたりする事件が起こりました。

この教会は、日中は保育園として使われていた施設でした。ですので、教会の牧師さんがすぐに壊れた家具なんかを直して、次に日からちゃんと保育園が開設できるようにしました。

ものを直すというところは教会の方でやってしまったので、この委員会のところに行っても、ものを直すのは選択肢としてないよと。その代わり何をしろと言ったかということ、ただ単に、子どもたちに、みんなに謝罪をしろと言ったのです。

その教会のお祈りの時間に子どもたちがやってきて、地域社会の人々の前で謝ったのです。本当に緊張して、見ても分かるぐらいに震えていて、謝りました。謝った後に、教会の関係者や地域社会の人々は、その子どもたちのところにやってきて、握手をして、「謝る勇気を持ってくれてありがとう」という言葉を掛けていました。子どもたちも本当に感動して、涙を流す子どももいました。それを見て、私は本当に、こういうかたちで子どもたちは学んでいくんだなということを感じました。

犯罪を起こしたその日、本当に子どもたちは、ただただ楽しんで、ふざけてやっていたわけで、それがどんな害を地域の人々に及ぼすのか、どういう結果をもたらすのかということについて考えていなかったわけです。でも、こういった謝るというプロセスを経ることによって、それがどういう問題を引き起こすのかということ、実際に身をもって学ぶことができました。そういった間違いを起こしたときにも、その後で社会から疎外されるのではなくて、温かく迎え入れてもらったということが非常に重要だと思います。

ここでもやはり鍵となっているのは、家族、地域社会、実際に被害を受けた人々が、その更生のプロセスに関わっていくということです。また、その犯罪で、どんな結果が生じるのかということ子どもたちに気付かせる。それに対して、行動を起こさせるということが非常に重要です。これが将来の有効な少年司法制度を考える上で、とても大切だと思います。

いま、この会場にも、現場で活動をなさっている方々がたくさんおられると思います。それを踏まえて申し上げたいのですけれども、こういった少年たちに、まず最初に接しているのは、現場にいらっしゃる皆さんだと思います。現場の皆さんが、子どもたちにどういう対処をするのか、処分をするのかしないのかということ判断なさっているのだと思います。処分をするのか、あるいは、家族とか地域社会の力をもっと借りて、何か手助けをするのかという判断は、現場の皆さんがなさっている。

私は、日本のシステムがどうなっているのか、正確に理解しているわけではないのですが、やはりそういった判断は現場で行われていることが多々あると思います。そうした現場の判断というのが、子どもたちの生活に大きな違いをもたらしていると思います。

地域社会や家族を一番よくご存じなのは、現場にいらっしゃる皆さんです。そういった皆さんが、地域の力を借りてやっていく。それが大きな違いを生み出しているのだと思います。

ここまで、さまざまな提案をしてきて、日本ではすでにうまくいろんなことがなされているということについて触れてきました。ここで、私が以前書きました本について、ご紹介をしたと思います。

『The Cycle of Juvenile Justice』という本で、同僚のトーマス・バーナードと一緒に書いた本です。この本の中では、アメリカの歴史、現状について述べて、その後に提案をしています。いまこれを読み返してみましても、現在の世界にも



当てはまるものだと思いますので、それをご紹介しますと思います。

まず1点目に、先ほども申し上げましたが、何も司法制度が少年非行を起こしているわけではありません。10代の子どもたちというのは、常に犯罪を起こすリスクにさらされているわけで、たいてい青年期が終わるまでに一度は逸脱行為をするものだと思います。

こういった行動というのは、例えば貧困家庭、あるいは問題を抱える家庭で育った子どもは、特にリスクが高く、薬物、銃にもさらされる環境にもいるわけです。

こういったことを考えますと、やはり司法制度を見直すということだけではなくて、社会の問題、こういった病巣を取り除く努力も求められるわけです。例えば、家族の不平等の問題とか、いろいろな問題に対処することを考える。そして、家族の強み、地域社会の強みを、いかに強くするのか。そういうことにも目を向けることが必要だと思います。

アメリカ、イギリスには、国親思想という考え方があります。これは、もともとは親をなくした子どもに対して、国が親代わりをするという考え方でしたけれども、最近では、子育てがうまくいっていない親に対しても、国が親代わりをするという考え方もあります。

しかし、国は決して親にはなれないのです。子どもを愛してあげることもできなければ、本を読んであげたり、習い事に連れて行ってあげたり、宿題を手伝ってあげたりはできない。国には親の代わりは、やはりできないのです。

国が何をしなければならないのかというと、家族を支えること。サポートすること。それが国の役割です。先ほども紹介しましたがけれども、リスクが高いと考えられる場合には妊娠中からでも、介入は早すぎることはないわけですから、サポートを行っていくことが求められます。

子どもたちというのは、大人と比べて犯罪を犯しやすいという生物学的な状況にあるということ。例えば、意思決定のプロセスが大人とは違うということも申し上げました。そういったことを考えて、少年司法、あるいは更生のプログラムを行っていくことが重要だと思います。

ただ単に子どもは大人のミニチュアなんだと考えたり、あるいは罰則を強化することだけでは有効ではないと思います。子どもは大人と違うからこそ、少年司法制度があるわけであり、その点は評価されることだと思います。

子どもたちは、まだまだ未熟なわけです。そういった未熟な子どもたちに対して、何か悪いことをした場合に何が起こるのかということを、ちゃんと伝えていく。何か間違いを起こしてしまった場合には、その修復の仕方を教えてあげる。どうやってそれを元に戻せばいいのかを教えてあげる。

その過程から、子どもたちは学ぶことができるわけです。そういった過程を得て（経て？）子どもたちは立派な社会の一員へとになっていくのだらうと思います。これが今後の司法を考える上で、とても重要なことかと思っています。

皆さまの非常に高貴な使命に、私の今日の発表が何らかのお役に立てれば非常に幸いです。どうもありがとうございました。

